

---

# 魔法先生ネギま！～二人の子供は魔法先生～

フラット

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法先生ネギま！～二人の子供は魔法先生～

### 【Nコード】

N4353D

### 【作者名】

フラット

### 【あらすじ】

魔法学校を卒業し“立派な魔法使い”になるため修業として先生になったネギ、ある日一通の手紙によって止むを得ず先生となったレイズ。二人の子供先生が進んでいく物語とは！？      ご意見・ご感想・評価などお待ちしています。まだ表現力に自信が無いので間違ったところやもう少し分かりやすく……など是非是非書いていってください！

## 1 時間目 不幸な手紙

赤い

周りを見渡しても赤赤赤赤

真っ赤な紅蓮の炎が町を覆い尽くす

その中には

人外の悪魔

石にされた者

殺された者

戦う者

守る者

その中に一人

全身が血まみれの子供がいた

その瞳には感情が無いかのように光を失っている

子供を中心に多くの人が死体となって辺りを更に赤く染めている

子供の眼からは一筋の涙が頬を伝い落ちていた

ピピピピシ！………ピピピピシ！………

「ん………ん………」

ピピピピシ！………ピピピピシ………

機械音の主に手を伸ばしゆっくりと起き上がる。

「……………眠い」

時刻は現在6時。

「ん………」

ベッドの上で小さく背伸びする。

顔洗うか………

家の中は蒸し暑いほど暖かく、  
窓からは日の光が差し込んでいる。

ふう……………

今日も暑いなあ。

顔を洗い終えて今は玄関の方へ向かっている。

一人暮らしだと毎日郵便物をチェックするのが日課になってしまった。

「さて……………と、何か届いてるかな」

そつ呟き郵便受けに手をかける。

ガチャッ

郵便受けの中にあつたのは小さな小包と手紙が2通。  
小包の方は差出人の名前がどこにも書いていなかった。

「ん？誰からだろ」

怪しさ半分期待半分で小包を開けると、  
中に入っていたのは……………

「鍵……………だよな？ それと腕輪か」

鍵と腕輪を手に取り多方向から観察してみた。

鍵は銀素材で出来ていてなんとも言えぬ歪な形をした物だった。

腕輪は木製で表面には鉄板が固定されていてその上に文字が刻まれている。

腕輪が置いてあった側には説明書のような紙が備えられている。

「え〜と……………」『この製品をお買い上げ下さってまことにありがとうございます。』

……………

いやいや、買った覚えなし。

心の中でつつこみをいれ続きを読む。

〔紙の内容〕

『この製品をお買い上げ下さってまことにありがとうございます。』

製品説明：この腕輪<sup>リング</sup>は左右の手どちらに付けたかで効力が変わります。

右手：身体能力が多少上がります。

左手：半径300M以内のあらゆるものを感知できるようになります。

す。

尚、この製品は杖の代わりとなる媒体でもあります。  
左右どちらに付けても魔法発動体として利用できます。」

「ああ………うん、どっちも魔法使えばできるな。  
それにしても曖昧な説明だなあ………」

まあ魔法で強度上がってるみたいだから壊れる心配は無いか」

次に手紙の方へ手を伸ばした。

差出人      クレアス ・ F ・ ブライアंक

ん？ 師匠から？

一体何の用だ？

魔法界の手紙は録画式で再生を押すと立体映像で出てくる。  
まあビデオカメラだとも思ってくれ。  
封を開けて再生ボタンを押す。

「どれどれ………」

翌日

視点        ???        i n        ウェールズ        メルディアナ魔法学校

『卒業証書授与

この七年間よくがんばってきた

だが    これからの修業が本番だ

気を抜く出ないぞ』

『ネギ・スプリングフィールド君』

「ハイ！」

そこでは魔法使い達が集まりこの学校を卒業していく5人の子供達への卒業式が行われていた。



「ふわぁ……………」

魔法学校の卒業式が行われている中、隅の方であくびをする少年。  
な〜んで俺がこんなの見なくちゃいけないんですよ。  
卒業はおるか入学すらしてないのに。

それは昨日の手紙のことだ……………」

手紙の内容はこうだ

『やぁ、レイズ 久しぶりだな。 一人暮らしにはもう慣れたか？  
プレゼントはどうだ？ 腕輪の方は知り合いの店に作ってもらった。  
ぁぁ鍵は無くすなよ 常に大事に持つておけ もし無くしたら……

……………」

それと明日の朝ウェールズの魔法学校に行け 場所くらいは知って  
いるだろ。

そこの校長にもう一つ方の手紙を渡せ わかったな？

ではまたいつか。 byクレアス』

無くしたらなにさ……………」

いきなり送りつけてこれかよ！

てかあそこって山奥じゃねえか！ 直接送れよ！

はぁ……………」しょうがないか……………」

行かなかつたら何されるかわかったもんじゃないからなあ。

「はぁ……………」

小さな溜め息をついてリビングへと入って行く。

そして今日の朝

「やっとついたあゝっ……………」

持ってきたカバンを地面に置き、  
疲れたためか軽く背伸びする。

目の前には白い石造の大きな教会のような建造物。  
建物の周りには緑が生い茂っている。

それにしてもデカイな、さすが魔法学校  
……………関係無いか。

さて……………入るか。

うん……………捕まってしまいました、ハイ。

「子供がこんなところに勝手に入り込んだらだめだろ」

今、某神殿のような壁が無く石柱が続いてる廊下に居ます。

ローブを被った男が数人。  
やっぱ全員魔法使いだなあ…………

「うん、ここの校長に手紙を届けに来ただけだから」

「今日は卒業式だから校長は忙しいんだよ、わかったかな」

「だから渡したらずぐ帰るから」

男の一人が肩をすくめた。

はあ…………このままじゃ帰るの遅くなるな。

そんなことを考えていると後ろの方から人が近づいてきた。

「どうしたんじゃ、騒々しい」

振り向くとそこには老人がいた。

アホ毛が4つあり白髪で腰の位置まで伸びている髪。

大きく立派なヒゲは胸の位置まである。

肌は焼けていて茶色になっている。

他の人とは違い立派な杖を持ち、

大きな土色のローブを着ていて足がすっかり隠れてしまっている。  
ていうか見えているのは顔と手だけだ。

「あ、校長！ 実はですね この子供が「あんたが校長？」あ、こ  
ら！」

「そうじゃが、君は誰かの？」

身なりを整え一礼して口を開く。

「申し遅れました、我が名は

レイズ・G・フラインスと申します。

我が師クレアス・F・ブライアンの命により  
校長であるあなたに手紙を届けに参りました」

「ふむ………」

クレアスから手紙とな………  
ではこの子が………」

「どうぞ」

そしてまだ開封していない手紙を渡す。

「うむ、確かに受け取った」

受け取った手紙をローブの中へ入れる。

「では私はこれで失礼します」

また一礼してこの場を去ろうとする。  
しかし

「ああ、ちょっと待ちなさい」

「はい、何でしょう?。」

その言葉を聞いて近くにいる男の一人が……

「あの……校長、そろそろお時間の方が」

「わかっておる、すぐ済むからの」

「それで、何でしょうか？」

「うむ、今日は卒業式というのは知っているかの？」

「はい、さっき聞きました」

「それが終わったらワシのところに一度来てくれ」

……

「何故です？」

「ちょっと話したい事があるんじゃない？」

「うん……」

「どうする？」

「断ろうか」

でも流石に校長の頼みを無視できないよなあ……

「わかりました、終わったらまた伺います」

「そうか、それなら卒業式でも見てゆけばよろう」

そう言い残しこの場を後にした。

そして現在に至る。

『アンナ ・ ユーリエウナ ・ ココロウア君』

ん、最後か……

そういや最初のやつスプリングフィールドとか言ってたな？

スプリングフィールド……………スプリングフィールド……………

どっかで聞いたことあるな。

うゝ……………っん……………

……………

ああ……だめだ思い出せない。  
まあいいや、どうせ俺には関係ナッシング。

視点      ネギ    i n    魔法学校    廊下

キ、キンチヨウしたあ……..  
もうすぐかな……..

卒業証書を手に持ち廊下を歩いていると後ろから二人の女性が追いかけてきた。

一人は黒いローブを着ている子供、長髪で赤い髪の一部を2つの黄色いリボンでツインテール状にした女の子。

もう一人はこの学校の教員服を着た大人、金髪で長髪。      両耳に白いパールピアスをつけている女性。

「ネギ    何て書いてあった？    私はロンドンで占い師よ」

「修業の地はどこだったの？」

「今    浮かび上がるとこ」

そして卒業証書の紙が薄く光りだす。

「お……………」

「どう?」

光が集まって文字になっていく。

浮かび上がった文字は

「え」と……………」

A T E A C H E R I N J A P A N .

「日本で……………先生をやること」

「「「ええ……………!?」」」

え? えええええ!?  
せ、せせせせ先生!?



ボボボ僕が！？

あ、ああわわわああ

「と、とにかく！ 校長に聞きに行きましょう！」

視点 レイズ

ええ、今の状況を例えるなら

ここは何処、私はだれ？

みたいな感じです。

つまり迷ってしまいました、ハイ。

俺は方向音痴ではありません。

この学校がメチャ広いんです。

「どうしょ……………」

ああ、もう、校長どこ行ったら会えるのよ。

誰かに聞こうにもだ〜れも居ないし……………  
う〜ん……………

「お、そうだあの腕輪使えばわかるかも」

確か持ってきてたような……………

お、あったあった。

でも初めて使うからなあ、うまくできるか……………  
カバンから腕輪を取り出し左手につける。

んっ……………

身体中に一瞬魔力が走り、神経が研ぎ澄まされたように敏感になる。

おお、これは結構使えるかもな。

しかも魔力まで感知できるのか。

数十秒経ち、扱いにも慣れてきた。

説明書には書いてなかったけど一方向に集中すれば感知できる範囲  
が広まるな。

それに腕輪に魔力を込めても範囲が広がる。

そろそろ本気で探すか。

意識を集中させる。

「お、いた。一人か、いや後ろにも二人いるな」

ん…………流石に誰かまでは特定できないか。  
性別もわからないしな。でも一人だけ魔力がデカイな……………  
まあ俺と同じくらいかな？  
ま、違う人でも校長の居場所聞けたらいいか。  
そう思い急いで三人のもとへ向かう。

お、発見。

そこに居たのは二人の子供と一人の女性。

「すいませ」「ええ  
！？」「な、何だ？」

「と、とにかく！ 校長に聞きに行きましょう！」

そう言つて三人は走つていつてしまった。  
校長のそこに行くのか、じゃ追いて行くか。  
レイズも走つて後を追いかける。

視点      ネギ

日本が……………僕の……………先生……………  
まだ混乱してる様子。

長い石柱が続く廊下を走っているうちに人影が見えてきた。

「こ、校長“先生”ってどーゆーことですか!？」

「ほう……………“先生”か……………」

「何かの間違いではないのですか？ 10歳で先生など無理です!」

「そうよ！ ネギったらただでさえチビでボケで……………」

アーニヤ……………」

「しかし、卒業証書にそうかいてあるのなら決まった事じゃ。  
立派な魔法使いになるためにはがんばって修業してくるしかないの  
う」

「ああっ」

その言葉と同時に金髪の女性が倒れそうな勢いでふらつく。

「あ、お姉ちゃん!」

「ふむ……………」

「安心せい、修業先の学園長はワシの友人じゃからの。  
ま、がんばりなさい」

「……………」

決心したためかネギの口元に少しの笑みが浮かび

「ハイ！ わかりました！」

## 1 時間目 不幸な手紙（後書き）

初めまして！ この度小説を書かせていただいた フラット と申します。

小説を書くのは初めてでして多分間違った文字や文法などこれから先出てくると思いますのでその時はどんどん指摘していつて下さい！参考になりますので。

なお、しばらくは原作よりになってしまいかもしれませんが、  
そのところは勘弁して下さい…………… < (——) >

休み時間 オリジナルキャラ設定（前書き）

第一回オリキャラ設定！  
パチパチ

.....

## 休み時間 オリジナルキャラ設定

名前：レイズ ・ グライム G ・ フライネス

性別：男

年齢：13

身長：163cm

性格：明るい方でめんどくさがり屋だが真面目でやる時はやる。  
一応礼儀はわきまえている。

大抵の物事には冷静に判断し対処する。

趣味：魔法書集めでかなりの数を持っている。

特徴：髪の色は薄い青色で後ろ髪は短めの少しラフな感じ、前髪は左分けて眼が少し隠れるくらい。

瞳の色は少し明るいレッド、肌は普通色で顔は整っている。

身体は細身だが筋肉質の体。

背景：両親は不明、生死も定かではない。

クレアスとは6年前ある森で拾われ3年間寝食を共にしてきた。

その3年間で主に魔法の修業と体力作りをこなした。 本人曰く地獄の方がまだマシだとか……………

残りの3年間は「もうお前に教えることは無い、自分のやりたいようにやれ」と言われレイズのもとを去っていったが、  
不定期だったが手紙や電話をくれたりなどしていた。



その間、レイズはあらゆる武術や知識を学ぶため各地を転々としてきた。

学んだ武術を活かして独自の戦闘形態を作り上げている。記憶力がとても良く大学卒業程度の知識は持っている。

得意魔法属性：火 ・ 氷 ・ 雷の3種。

尚、別の属性も使えるが威力が低くなるため基本的にはこの3種を使う。

戦闘スタイル：基本的には接近戦主体の魔法拳士だが後衛魔法も得意としているため

エヴァやフェイトと同じオールラウンドと記入しておく。

魔力容量はネギやこのかに匹敵するほど。

魔力コントロールは完璧に出来ており、気も使えるが威卦法かんかほうは自分には合わないらしく使用しない。

接近では「気」、後衛では「魔力」と分けて使っている。

瞬動術も使えるが、その際は気を使用して完成形に達しているため縮地となる。

杖や箒を必要としない浮遊術も使える。

レイズに関してはこんな所ですかね……………

まだ設定としては考えている部分もありますが、それはまた追々本編で使用することにします。

え？ 年齢の割りに身長とか諸々が合っていないって？

.....

では次行ってみましょ  
(オイ

名前：クレアス  
・フレイアットF・ブライアंक

性別：男

年齢：不明

身長：不明

性格：不明

趣味：不明

特徴：.....不明

すいません。 クレアスの方はまだ設定がまとまっていないくて……

……

多分、本編中での説明となると思います。  
ん？ なら出すなって？

……

では次の連載でまた合いましょー ノシ

## 2 時間目 サヨナラと初めまして

視点 レイズ inメルディアナ魔法学校 校長室

そこには校長とレイズの二人だけがいた。

「それで、話って何ですか？」

「まあ掛けたまえ、それと普段の言葉使いでかまわんよ」

「……………わかりました」

そう言われたので近くにあった椅子に腰を掛ける。

「で、話って何？」

「うむ、この手紙のことだな」

ロープから先程渡した手紙を取り出した。

「中身は読ませてもらったのじゃが……………」

「……………?」

何故でしょう……………

物凄く嫌な予感がするのですが……………

頼むから気のせいであってくれ！

「君にはワシの友人の学園の教師になってもらうことになった」

.....

WHAT?

え？

今なんてった？

教師？

何それ食べられるの？

あれ、今変な言葉が浮かんだような.....

ま、いいや。

「向こうの学園長には話を通しておくからして「ちょっと待った」

ん？」

そう言つて校長の言葉を遮る。

「何で俺が教師なんかせにやなんのだ」

「……………君は聞いていないのかね？」

「何を」

「そうか……………」

校長は表情を変え何か思い出しげに口を開く。

「3年くらい前に頼まれた事があつてのう」

「師匠に？」

「うむ」

「何て？」

「それはの……………」

「『近いうちに私の弟子が手紙を持ってお前のところに行くから、その手紙に書いてある通りにしてくれ』と頼まれたのじゃ」

……………それだけ？ いや、マテ

魔法学校の校長に“お前”ってあなたそんなに偉かったの!?

「えと……………じゃあ手紙の内容って俺に教師になれって書いてあったの?」

「そういつことじゃ」

師匠おお! あんた一体何考えてるんだああ!?

いや待て! まだ手はあるはずだ! 考えろ! 考えるんだ、俺!

「ちなみに『断ったり逃げたりしたらどうなるのかわかっているだろうな』とも書いてあったぞ」

終わった……………

「わかりましたよコンチクショ〜!」

レイズの眼からは涙が溢れ出ていたとか……………

日本語の勉強やら荷物の整理、教員資格を取るため半年以上の月日が流れた。

ある駅のホーム

大きな荷物と杖を持った子供と二人の女性。

「もう行ってしまうのね……………」

「お姉ちゃん……………」

「……………」

アーニヤは黙ったままだった。

「僕、マギステル・マギ立派な魔法使いになって戻ってくるからね！」

ネギ……………」

少し寂しさがあるが精一杯の笑みを見せ



「ええ、そうね。行つてらっしゃい、ネギ」

「うん……………行つてきます」

そしてアーニヤの方へ顔を向け

「元気でね、アーニヤ」

「っ……………あんたもね」

ピリリリリリリリリッ

列車の発車合図が鳴る。

「行つてきます」

そう言つて列車に乗り込んだ。

「体に気をつけるのよ！ ご飯もちゃんと食べてね！」

扉が閉まる

そして列車は瞬く間に走り去つていった……………

行っ  
てらっ  
しゃい

一方レイズはというと

「え〜と、鍵……………よし金も持ったチケットも持ったし、その他荷物もOK」

家の玄関先で荷物の確認をしていた。

「ふう……………さてと、行きますか」

その言葉と同時に扉を開ける

視点      ネギ      in日本      駅前

「わゝ、すごいや。      おっきな建物がいっぱいだなあゝ」

でも麻帆良学園<sup>まほりょう</sup>にはどう行ったらいいんだろ……………？

辺りをキョロキョロとろついていると

「どうしたのボク？      ひよっとして迷子？」

「ん？      どうしたんだ？」

男女のカップルが近づいて話しかけてきた。

「あ、えっと……………麻帆良学園<sup>まほりょう</sup>にはどう行けばいいのでしょうか？」

「ああ、それならあっちの1・2番線のホームに入って下り電車に乗ればいいよ」

男の方が1・2番線の入り口を指差して答えた。

「ありがとうございます！」

頭を下げてお礼を言い急いでホームへと向かった

「気をつけてねえー!」

振り返ると二人とも手を振ってくれていた。

もう一度お辞儀をしてホームへと向かう

「おい! キップ、キップ!」

あ……………

「うわゝ、ニッポンは本当に人が多いな」

電車の中で、周りも込んできた。

「それに女の人一杯だ」

ネギの周りには制服を着た女生徒がたくさんいた。

『女の子にはやさしくなさいね』

金髪の女性の姉の言葉が浮かぶ。

「うん…………お姉ちゃん」

突然スピードが落ちたためか前と後ろの人に挟まれる。

「あうう」

「何？ あの子」

「外国人？ クスクス」

興味を持ったのか数名の女性がネギに笑みを見せる。

「僕どこ行くの？」

「ここからは先は中学、高校だよ」

身長からして中学生以上には見えなかったのだろう。

「いえ、その……………」

あれ…………鼻が…………

「ハ…………ハハ…………ハックション!!」

ぶわぁっ！

瞬間的にネギの周りから強い突風が出来た。

きゃあ！

いやあっ

女生徒達のスカートがめくり上がりそんな言葉が聞こえてくる。

「あ……………」

慌てて両手で口を塞ぐネギ。

「な、何なの今の？」

「つむじ風？」

『次は、麻帆<sup>まほろ</sup>良学園中央駅』

「あ、もう着くよ」

そしてプシューと音とともに扉が開く。

「じゃあね坊や」

「気をつけてね」

「え……………」

周りにいた人全員が外へ飛び出していく。

「時間やばっ！ 遅刻だー！」

「急げ！」

『学園生徒のみなさん、こちらは生活指導委員会です。

今週は遅刻者ゼロ週間、始業ベルまで10分を切りました。 急ぎ  
ましょう 』

「急げ急げ！！」

「ちこくだー！」

目の前にはたくさんの生徒達が凄い勢いで駆け抜けていく。  
路面電車に乗る者、スケボーやローラースケートで走る者、  
さらにはバイクに乗って移動購買部と書かれた旗を付け飲食物を売  
る者、買う者までいる。

大半は自らの足で走っていた。

「わわわ、何コレ！？ スゴイ人！」

いそげー！

ちこくー、ちこくやー！

「これが日本の学校か」

ちくくー

「今週遅刻した人には当委員会よりイエローカードが進呈されます。くれぐれも余裕を持った登校を………」

驚きしかでないネギだった。時計を手に取り見ると……

「わ、いけない！僕も遅刻する時間だ」

ヤバイ！

「初日から遅れたらまずいぞ」

そう思い足に力を入れ地面を蹴り、急いで走り出す。

視点  
???  
in 麻帆良学園通学路 まほら

たくさんの人が走っている後ろの方の列で人をどんどん追い抜かしていく二人組みがいた。



「やばいやばいー！、今日は早く出なきゃいけなかったのに！」

一人はオレンジ色の髪で鈴が2つ付いたリボンを2本使ってツインテールにした活発そうな女の子。

「でもさ学園長の孫娘のアンタが何で新任教師のお迎えまでやんなきゃなんないの、しかも二人も」

「スマン、スマン」

もう一人は黒髪の長髪でローラースケートで登校する女の子。

「学園長の友人ならそいつもじじいに決まってるじゃん」

「そうけ？ 今日運命の出会いありって書いてあるえ」

「え、マジ！？」

「ほら」「」

そう言って手帳を取り出して見せる。

「しかも好きな人の名前を10回言っって「ワン」と鳴くと効果ありやて」

「うそっ！？」

どうにも胡散臭い事を言っているが

「高畑先生高畑先生高畑先生高畑先生………」（以下略）

「ワンッ！」

実際に試す人もいる。

いきなり大声で犬の鳴き声を人間が発声させたためか彼女の周りを走っていた人達が一斉に驚く。

させた本人でさえも……………

「あははは、アスナ高畑先生のためなら何でもするな……………ホン  
トにやるとわ……………」

最後の言葉は小さく呟く。

「殺すわよ」

彼女からは騙された自分を悔やむ気持ちと相手への憎悪で微妙な怒りが生まれた。

「え」と次は、逆立ちして開脚の上全力疾走50Mして「ニャー」と鳴く」

「やらねえ!!」

「にしてもアスナ足速いよね、私コレやのに」

一瞬足元を見て呟く。

「悪かったわね体力バカで」

その時彼女達の近くで風が走る。

「ん」

気づけばアスナと呼ばれた女の子の横を走る人影があった。

一緒に走るその人影の主は、表面は紅い髪だが下に黒毛があり、首の付け根くらいまでであるであろう髪を黒毛の方だけ紐で後ろに束ねている。

小さな丸メガネを鼻に掛けていてたくさんの荷物を背負っている子供が一人いた。

そしてその子供が口を開く。

「あの〜……………あなた失恋の相が出てますよ」

「え……………」

いきなりとんでもない事を言う子供であった。  
し……………しつれ……………？

「な……………し……………しつ……………って」

アスナは少しよろめいて

「何だところんガキヤー！」

「うわあああ!？」

涙目なのに凄い形相で目の前に子供に迫る。

「い、いえ何か占いの話が出てたようだったので」

「どどどということよ、テキトー言うと承知しないわよ」

涙を流しながらなおも子供に迫るアスナ。

「い、いえかなりドギツイ失恋の相が……………」

「ちょっとおお~~~~っ」

「なあなあ相手は子供やろ? この子初等部の子と違うん?」

「あたしはねガキは大ツツキライなのよ!」

「うひゃ」

そう言い放ち子供の頭を起用に掴んで片手で持ち上げる。

「取・り・消・しなさいよ~~~~」

「イタイ、イヒヤイ」

「坊や、こんな所に何しに来たん？」

「ここは麻帆良学園都市の中でも一番奥の方の女子高エリア  
初等部は前の駅だよ」

「そう！　つまり子供は入ってきちゃいけないのわかった？」

顔を近づけ身体を震わせながらそう言う。

「は、放してください〜〜〜っ」

あうっ……………な、なんて乱暴な人なんだ。

日本の女の人は親切で優しいって聞いていたのに……………っ。

「ほな、ウチら用事あるから一人で帰ってな」

「じゃあねボク……！」

大声で怒鳴って乱暴に子供を下ろす。

「いや、あのボクは……………」

「いや　いいんだよアスナ君！」

その時、別の男の人の声が聞こえてきた。

「お久しぶりでーす！！ ネギ君！」

声に釣られて上を見上げると

「えっ」

「あ」

そこには楕円形のメガネを掛けた渋めの男が窓から覗いていた。

「た、高畑先生！？」

「おはようございます」

「お、おはようございます」久しぶりタカミチーッ！……！」

「！？ ……………っ」

アスナが一瞬後退りする。

「し、知り合い……………！？」

「麻帆良学園へようこそ、いい所でしょう？」

「ネギ先生」

.....

「え……………せ、先生？」

黒髪の女の子が聞いてみる。

「あ、ハイそうです」

コホンと咳払いをし

「この度、この学園で英語の教師をやることになりました  
ネギ・スプリングフィールドです……………」

「え……………えええ……………！！！！！！」

流石に驚いている二人。

「ちょ、ちょっと待ってよ先生ってどーいうことよ！？」

アスナはネギに近づいて胸倉を掴む。

「あんたみたいなガキンチョがー！」

「まーまーアスナ」

黒髪の女の子が抑えようとする。

「いや彼は頭いいんだ、安心したまえ」

いつの間にかタカミチと呼ばれていた男が下りて来ていた。  
そしてネギを放して下りてきた男に振り向く。

「先生……………そんなこと言われても……………」

いくら頭がいいからって……………  
こんな子供<sup>ガキ</sup>が……………

「あと、今日から僕に代わって君達A組の担任になってくれるそうだよ」

ガーン、という効果音とともに泣くアスナ。

「そ、そんなあ。アタシ、こんな子イヤです。  
さっきだってイキナリ失恋……………いや、失礼な……………言葉を私に……………」

「いや、でも本当なんですよ」

「本当言っない！」

またまた胸倉を掴む。

「大体あたしはガキがキライなのよ！  
あんたみたいに無神経でチビでマメでミジンコで……………」



などと暴言に近い言葉を吐きまくるアスナ。

うつつ、ひどい言われ方だ。 何だよ、この人ー。  
占いだって親切で教えたのにーっ。

「ん……………」

あ、また……………

「ハ…………ハ……………はくちんっ！」

その瞬間、近くに居たアスナにだけ強く突風が当たったためか、制服の全てのボタンが弾き飛ばされ支えを失った制服は地面へと落ち、一瞬で下着だけの姿になる。

白いブラと可愛いクマの顔の刺繍入りのパンツが露になる。

「な……………！？」

状況が掴めないのか、驚いてなのかその場で立ち往生していた。

「あ……………」

それを見ていたタカミチは目を逸らす。

はうっ

そして、手で胸を隠しながらその場に座り込む。

くまパン……

毛糸のくまパンか

まったくー

そしてやっと口が開く。

「キヤ

ッ 何よコレ

ッ！」

体操用のジャージに着替えて学園長室へと向かう三人。

そしてやや乱暴に扉を開ける。

その部屋に居たのは奥でいつものように椅子に座っている学園長と、薄い青色の髪をし瞳は赤く顔は整っており、アスナと背は同じくらいで黒っぽい藍色のスーツを着た男がいた。

わー、かつこええなあゝ

誰？ この人……………

うわー、スーツ着てるしこの人も先生なのかな？

「あ、えっ……………と、学園長先生。 こちらの方は……………？」

アスナが恐る恐る聞く。

あれっ？ ここの先生じゃないのかな？

「フオフオフオ、紹介しておこうかの」

「こちらは今日から2・A組の副担任をしてもらうことになった、  
レイズ・G・フライネス先生じゃ。 ちなみに教科は数学  
じゃぞ」

そしてレイズはこちらに微笑んで

「よろしく」

## 2 時間目 サヨナラと初めまして（後書き）

今回はレイズの麻帆良学園の経路にする予定です。

いやあ、二日で投稿する予定だったんだけど

流石にむずかしいですね、小説……………

まあ僕自身まだ学生ですので原作以外の所は言葉が見つからないって  
いうのか……………

更新は不定期ですがなるべく日にちを空けないようにがんばります  
！

### 3 時間目 挨拶（前書き）

14巻読んで気づいたんですけど亜子とレイズって髪と眼の色が  
いっしょなんです（オイ

### 3 時間目 挨拶

視点 レイズ in 日本 駅前

参った……校長に道聞いとけばよかったな……  
しょうがない駅員に聞くか。

「すみません、麻帆<sup>まほろ</sup>良学園までの道のりを聞きたいのですが……」  
改札の側で暇そうにしていた駅員に話しかける。

「それでしたら、1・2番線のホームに入って下りに乗って帆良学<sup>まほろ</sup>園都市中央駅で降りるとよろしいですよ」

「どうも」

キップを買いホームへと入っていく。

電車に乗り数分経つが制服姿の生徒は少ししか居なかった。

数名の女生徒がレイズを見ながら何か話しているのが聞こえる。

「ねえ、あの人外国人？ ちょっとカッコよくない？」

「ええーそうかな？ 私はもう少し地味な方が好みかも」

「あんたってそっち系？ 男は顔の方がいいじゃん」

などとレイズの耳に入ってくる。

顔ねえ……俺まだ13なんですけどな。

『次は、麻帆良学園中央駅』  
まほら

ん、もう着いたのか。

やっぱりちょっと早かったなあ……

目の前を歩いている生徒は数えるくらいしか見当たらない。  
この学園の始業ベルが鳴るまではあと1時間近くある。

「とりあえず学園に向かうか」

そう呟くと前へと歩き始める。

「で、迷いましたと……まる」

すでに学園内には入って学園長室に向かっていたレイズ。  
あれだ……俺にはいつのまにか迷子の能力が付いたのかな。  
イヤな能力だなあ  
止むを得ず近くの女生徒に話しかける。

「聞きたいんだけど、学園長室ってどこにあるの？」

「すぐその角の突き当たりにありますよ」

何ですと……

「ありがとう」

優しく笑みを見せ礼を言うレイズ。  
女生徒の顔が見る見る紅くなっていく。

「ッ」……い、いえどういたしまして！

そう言って小走りで廊下を駆けていく。

「？」

何だったんだ？ まあいいや、場所も聞けたし。

そして学園長室へと向かう。



ガチャッ

「失礼します」

扉を開け、目の前に見えたのはソファに座って耳掻きを持った女性と、

その女性の膝の上に頭を乗せて耳掃除をしてもらっているじい。

「ああ……………そこじゃ……………そこ……………ん？」

レイズに気づいたじい。

「ごゆっくり」

満面な笑みを見せるレイズ。

カチャリ

帰るか……………

来た道に戻ろうとする。

師匠には……………そうだな、うまく言っておじい。

ガチャッ

また扉が開く。

「あなたレイズ先生……………よね？」

さっきの女性が呼び止める。

「いえ、多分人違いでしょう。俺はもう帰りますんで、それじゃ」

「どうぞ中へ入ってください」

人の話聞いてますか？

まあいいか……………

再び中へと入っていくレイズ。

さっきのじじい……………もとい学園長は奥の椅子に座っていた。

「フオフオフオ、さっきはすまなかったのう」

「いえいえ、俺には関係の無い事ですから」

「まあその話は措いとしてじゃ、その格好は何かならんかのう？」

現在のレイズの格好は黒のズボン、紅いVネックのTシャツに黒のコートを着ている。

「スーツは持ってきているので更衣室の場所でも教えてください」

「うむ、ではしずな君に案内してもらいなさい」

さっきの女性がレイズを見て微笑んでいる。

「よく似合ってるわよ、レイズ君」

着替えて更衣室から出てきたレイズ。

ネクタイは赤、白いYシャツの上に上下とも黒っぽい藍色スーツを着ている。

「そうなんですか？ こーいっのはあまり着たことなくて」

ここで学園内、いや学園の内外で放送が鳴り響く。

内容はあと10分で始業ベルが鳴るといったものだった。

「戻りましょうね」

そう言って学園長室へと戻っていく二人。

「フオフオフオ、やっと先生らしくなったのう」

「そりゃどうも」

「早速じゃが、レイズ君の授業は明日からで。今日は見学でもしていきなさい」

「わかりました」

「それともう住むところは決まったのかな？ あいにく教職員用の宿舎は空きが無くてのう……」

「いえ、まだですが自分で探しますのでご心配なく」

バンッ！

扉が乱暴に開く。

入って来たのは三人。

背の低い子供とジャージ姿の女の子とこの学園の制服を着た女の子。少しの間があつて一人が口を開く。

「あ、えつ……と、学園長先生。 こちらの人は……？」

レイズと学園長は特に驚いた様子も無く三人を見ている。

「フオフオフオ、紹介しておこうかの」

ん？ あの子たしか向こうの学校で見た子供だよな？  
てことは魔法関係か何かか？

「こちらは今日から2・A組の副担任をしてもらうことになった、  
レイズ・G・フライネス先生じゃ。ちなみに教科は数学  
じゃぞ」

レイズは三人に優しく笑みを見せる。

「よろしく」

「なるほど、修業のために日本で学校の先生を……………」

まさかこの子も教師になるとはな……………  
俺だけじゃなかったのね。

てか何か作為を感じるんだけど？

「そりやまた大変な課題をもらうたの〜」

「は、はい。 よろしく願います」

小さくかしこまるネギ。

「レイズ君もそうなのかの？」

「いえ、多分違うと思います」

「ふむ……しかし、まずは教育実習生とゆーことになるかのう」

「はあ」

「今日から3月までじゃ」

ん？ なんだそんな短い期間でいいのか。

3月までか………頑張らなくちゃ。

「ところで二人には彼女はおるのか？ どーじゃな？ うちの孫娘このかなぞ」

「ややわ、じいちゃん」

間髪を入れずこのかと呼ばれた黒髪の女の子がどこから取り出したのか金槌を使ってツツコミを入れる。

「ちょっと待ってください！」

アスナの声が響く。

「だ、大体子供が先生なんておかしいじゃないですか！ しかもうちの担任だなんて………」

む……っ………

俺もその意見に大賛成。 てか学園長、血出てますが平気なので？

学園長は頭から血を出しながらフオフオフオと笑って（？）いる。

「ネギ君、この修業はおそらく大変じゃぞ」

学園長がアスナの無視して話し出す。

「ダメだったら故郷<sup>くに</sup>に帰らねばならん。二度とチャンスはないがその覚悟はあるのじゃな？」

「は、はいっやります、やらせてくださいっ！」

あれ？ 俺は含まれてないの？

このかはネギを見て微笑んで、アスナは腕を組んで何か唸っている。

かわえーな

さっきから修業って何なのよっ……

「うむ、わかった！ では今日から早速やらしてもらおうかの、指導教員のしずな先生を紹介しよう」

「しずな君」

「はい」

入り口とは別の扉が開き女性が入ってくる。

そういえばどこに居たんだ？

「む」

ネギの顔がしずな先生の大きな乳房の間に入る。

「あら、ごめんなさい」

「わ……………」

わざとなのか素でわからなかったのだろうか、いや恐らく前者だろう。

「わからないことがあつたら彼女に聞くといい」

「よろしくね」

しずな先生がネギにウィンクする。

「あ、ハイ……………」

「そうそう、もう一つ」

「このか、アスナちゃん　しばらく二人をお前達の部屋に泊めてもらえんかの」

「げ」

「え……………」



「ええよ」

何故そうなる……………

「もうっそんな、何から何まで学園長ーっ!」

当の学園長はあいかわらずフオフオと笑っている

「学園長、俺は別に大丈夫ですよ」

「そうは言ってもものう、君もまだ子供じゃろって」

「」「え?」「」

ネギ、このか、アスナがそんな声を同時に発する。

「どーいう事ですか?」

「レイズ君はまだ13なんじゃよ」

「」「ええええ」「」

13って……………年下!?……………見えない。

13かぁ、見えへんなぁ」

あわわ、てっきり二十歳くらいだと思ったのに。

「と、とにかくイヤです！」

「ええやないの、アスナ」

「ガキはキライなんだってば！」

「仲良くしなさい」

うぐっ……

学園長の言葉で静まる。

ネギとアスナはそれぞれ着替えてそっぽを向いて教室へと歩いている。

なぐんかおかしいのよね、こいつ……

「あの………」

ネギが話しかけるとアスナは睨みつける。

「あんたなんかと一緒に暮らすなんてお断りよー！　寝袋でも暮らせばいいでしょ………」

何かとんでもないことを言っているアスナ。

「じゃあ私先行きますから、先生!!」

そう言つてアスナが教室へと入っていく、その後をこのかが着いていく。

「あ……………」

残ったのはネギとレイズとしずな先生。

「何ですか、あの人は……………」

「ウフフ……………あの子はいつも元気だからね、でもいい子よ」

「ハイ、コレ クラス名簿」

そう言つてネギとレイズに名簿を渡す。

「それより授業の方は大丈夫なの？ ネギ君」

「う……………ちょ、ちょっとキンチョウしてきました」

「ほら、ここがあなた達のクラスよ」

廊下側の窓から覗く二人。

……………！ うわー

中に見えるのはそれぞれ挨拶を交わし、肉まんを売っていたり、黒板付近で何か企む者、

窓から外を眺めていたり、本を読んでいる者、何かを必死で描いている者、など賑やかな風景が目映る。

これが……僕がこれから教えることになる人達か！……………

ふん……………結構いるな。

「そうだ、クラス名簿！」

ネギが名簿を開く、続いてレイズも開く。

そこには1～31までの生徒の名前と出席番号、入ってる委員、部活やサークルなどが書かれていた。

それと手書きでタカミチからのメッセージなども書いてある。

「げ……………い、いっぱい……………タカミチからの書きこみがある……………」

「早くみんなの顔と名前覚えられるといいわね」

「あつ」

うつうつ……………こんなたくさんの年上の女の人達に教えるのか……………？

な、何だかドキドキしてきたぞ……………でも……………がんばらなくちゃ！

よし、覚えた。

てか1番目の生徒の服が違うつてどういうことだ？  
まあ見ればわかるか。

「担任なんだしネギ君が先に入ったら？」

「え、あうつ……………ハイ、そうですね。わかりました」

コンコン

教室の扉をノックするネギ。

「あ」

教室内が静まりこのかが声を上げる。

来たな

くすくす

うししっ

微かに笑い声も交じって聞こえる。

ガラッ

横スライド式の扉が開く

「失礼しま……………」

と同時に上からチョークの粉たっぷりの黒板消しが落下する。

ん？

ネギがそれに気づいたと同時に黒板消しがピタリと止まる。

！？

げっ……………

あ……………やば……………これは有名な黒板消しトラップ！ 日本にもあるんだ。

流石にやばいと思ったネギは黒板消しを動かす。

その間のやり取りは一瞬だった。

再び動き出した黒板消しはネギの頭に落下し粉が舞い散る。

「ゲホゲホ いやー、あはは。 なるほど ゲホ ひっかかったやつたなあ ゴホ」

生徒達が見ている中、何ともわざとらしく言うネギ。

ネギが一步前へ進みロープに足が掛かる。

「へぶっ！？」

バランスを失い前へと倒れる。

「あぼ」

そこに水の入ったバケツが落下し頭から被る。

「ああああああ」

そのまま1回転し更に先が吸盤になった矢が放たれる。

「ぎゃふんっ！」

最後は木製の教卓に背中から入る。

「あらあら」

あはははははは

教室内は笑いが飛び交う。

今の……………？

その中に一人疑問に思った人が居た。

「な……………な」

「えっ……………」

「あ……………あれ……………？」

罨に掛かったのが子供とわかったのか数名の生徒が駆け寄る。

「えーっ、子供!？」

「君、大丈夫!？」

「てっきり新任の先生かと思って」

「いいえ、その子があなた達の新しい先生よ」

しずな先生が手を叩き注目させて言う。

「さ、自己紹介してもらおうかしら、二人とも」

「は、はい」

「わかりました」

生徒は全員元の席に座り、教卓の前に立つネギとレイズ。

「ええと、あの……ボク……ボク……」

先に口を開いたのはネギ。

「今日からこの学校でまほ……英語を教えることになりました  
ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけど  
よろしく願います」

続いてレイズが話す。



「同じく、今日からこのクラスの副担任で数学を教えることになった  
レイズ・G・フライネスです。これからよろしく」

.....

沈黙が少しの間続くが

『キャアアッ！　かわいいいゝゝゝ　かつこいいいゝゝゝッ』

大勢で二人に駆け寄る。

「何歳なの！？」

「えうつ！？10歳で.....」

「13」

「えゝ！？　見えない！」

「どっから来たの！？」「何人！？」

「ウェールズの山奥の「ウェールズってどこ？」あうつ

「イギリスのバーミンガムから「バー.....ガム？」」

「今どこに住んでるの!？」

「いや、まだどこにも……」

「同じく」

「血液型は!？」

「誕生日は!？」

「身長は!？」

「あうううっ」

「ちょっとまつ……」

ワイワイ ガヤガヤ

教卓付近で盛り上がる生徒達。

「…………マジなんですか？」

一人の生徒がしずな先生に聞く。

「ええ、マジなんですよ」

「ホントにこの子達が教師なんですか!？」

「こんなカワイイ子やかっこいい子もらっちゃっていいの〜〜〜!？」

「コラコラ、あげたんじゃないのよ。 食べちゃダメ」  
「ホントなんだー」

「ねえ、頭いいの!？」

「い……一応大学卒業程度の語学力は……」

「俺もその程度はある」

「スゴ イ!!」

よ、よかった。 なんとか歓迎されてるみたいだ……..  
ちよつと危なかったけど……..

うゝむ、師匠はこんなとこ送りつけて何をさせたいのだろうか……

……

「二人はちゃんと教師の資格を持ってるけど、あなた達より年下よ。  
お手柔らかにね」

『ハイ』

不意に一人の生徒がネギの胸倉を掴み教卓の上へと乗せる。

「ねえ、あんたさっき黒板消しに何かしなかった？」

その生徒とはアスナだった。

「何かおかしくない？ あんた」

「え……」

ネギの顔色が青くなる。

へえ………あれを見てた奴もいたのか。  
一瞬だけだと思ったけど。

あわわわわ      ツ

どうしよう!?

### 3 時間目 挨拶（後書き）

たいして進んでませんね………スイマセン。  
もう少し展開早めにした方がいいのかな？

最近寒くなってきましたね（俺の地域は  
もう毎日耳とか顔がすごく痛いですTT

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4353d/>

---

魔法先生ネギま！～二人の子供は魔法先生～

2010年10月10日02時56分発行